

竹内孝一『轉末 東三河・医学の動靜』

著者は愛知県豊橋市に居住し、医業の傍ら早くから医療器具の収集や地域医学史の調査に努めてこられた。その一端は本誌十八の四、二十の二にすでに史料紹介として発表されている。本書はそれらを含めて、著者の研究を纏めたものである。

本書は次の十一章からなっている。

- 一 浅井家の家系、二 浅井完晃宛書簡、三 浅井弁安宛書簡、
- 四 御出入医諸事書留、五 浅井家に残った山崎玄庵の遺稿、六 豊橋医学舎設立願、七 明治初期豊橋医師履歴、八 豊橋地方の種痘史、九 利光仙庵『引痘夜話』、十 漢方存統運動、十一 大沢謙二家と大沢岳太郎家の家系。

なお各所に著者収集の器具の写真紹介が入れている。

十一章のうち七章までは豊橋(吉田)の藩医であった浅井家の史料の紹介が主になっている。まとまった形で同家の史料が示され、地方の旧い医家の一面が明らかにされたことは貴重である。

同家は正保年間に藩医になった由で、元禄四年の阿蘭陀流外科免許状が紹介してある。第二章の完晃は八代目に当り、同章は錦小路家との関係の書簡が多いが、その時期の三河の医家の分布や錦小路家のその組織化の様子が窺える。第三章の弁安は九代目、鈴木春山、箕作阮甫の門人であり、兩人の他三宅友信、穂積晴軒、

大槻龍之進、同俊斎、坪井信良などからの手紙を通して、この地方への洋学の拡がり知られる。第四章は弁安の藩出入医としての安政元年から三年迄の書留であり、藩医としての生活のみならず、時代の動きも分かり、当地方では少い史料であり興味深い。

第六、七章は近藤恒次「明治初期における豊橋地方の医界」(『愛知大学総合郷土研究所紀要』第一七輯、のち同『近世の交通と地方文化』愛知大学総合郷土研究所研究叢書Ⅰ、名著出版、昭和六十一年収)でも扱っている史料であるが、本書によって新たに付け加えられた医家の履歴等もいくつかあり、注意される。なお豊橋地方の医家履歴は浅井家から寄贈されたものが、『明治初期豊橋医師履歴』と題して、市図書館にあり、現物を見ることが出来る。第八章は当地方の種痘の歴史を検討したもので、著者所蔵の史料の紹介もある。『魯西亞牛痘全書』の利光仙庵の出身地である当地の種痘が、何時から始まったかは論議のあるところである。著者は嘉永三年の前期かと推論している(二六七頁)が、確言するにはもう一段の実証が求められよう。第十一章は当地出身の大沢謙二、岳太郎の二東大教授の家系の検討であり、明治の中央の学者の多くが、地方の医家や旧家から出ていることを考える例としても興味深い。

地方の医家の調査は、墓を探したり、墓誌の読みに苦心したり、子孫をたどったり、断片的史料を関連づけたりといろいろな手間がかかるものであり、労多くして功少いと感をもまねがれないものだけに、著者の苦心は大きかったかと思われる。人物などについての解説も、地域的な事については、著者の目配りがうかが

えるところがある。ただ、史料の読みや返り点などに気になるところがかなりある。ぜひ改訂版で正してほしいと願う次第である。

(田崎 哲郎)

〔豊川堂書店 丁40 豊橋市呉服町三〇 昭和六十二年二月  
A 五判 二二四頁 一、五〇〇円 送料二五〇円〕

エズモンド・R・ロング著 難波紘二訳  
『病理学の歴史』

有名なロング (Esmond Ray Long 1890-1979) の病理学史 (初版一九二八、再版一九六三) が、このたび医学史に造詣の深い難波紘二教授 (広島大学、病理学) の手で邦訳された。たいそう意義深い仕事であり、難波教授の労に感謝したい。

内容は、古代の病理学から始まって、ガレヌス、ルネサンス、十七世紀、モルガーニと十八世紀、パリ学派、十九世紀の英国、ロキタンスキーと新ウィーン学派、ウィルヒョウ、病理組織学、細菌・免疫学、実験病理学と化学病理学、一九二八年～一九六三年の歩み、と十三章から成っている。最後の章は再版に当って追加されたものである。

何に書いてあったのかいま確かめられないので、原筆者には深くおわびするが、私のノートにこんな文章の抜きがきがある。

One of the most serious problems that confront us—what is most problematic is the meaning of the word *pathology* itself.

つまり病理学とは何なのか、それが一番の問題だ、ということである。

私は何年か前、一国の医学史というのは可能だろうか、ということ考えたことがある。たしかに日本医学史という本はある。しかしそれは主に鎖国時代を扱ったものではないか、少なくとも成功しているのはその部分だと思ふ。日本あるいは日本医学が、かなり明瞭に *define* される限りで日本医学史は可能なのだろう。

医学の中での病理学の範囲はかなり流動的である。眼科学や産科学と違って、病理学史ではまずこの問題につきあたる。ロングの視点は、少なくとも初版の段階では古典病理解剖学に据えられていて、医学史の中でその範囲に入るものを *positive* な業績として評価している。その割り切りかたはかなり素朴だが、そういう時代だったのであろう。視点が変れば、また趣きを異にした病理学史が書かれることになるが、ロングのあと、それを試みた人はいない。本書が病理学史として、いまのところほとんど唯一の成書である理由はここにあると思われる。

かつて原書を通読したが、あまり読みやすい英語ではなかった。この訳文はかなりこなれた日本語になっていて有り難い。しかしそのために何千年にもわたる歴史を性急に読みとばすおそれがある。これはゆっくり読むべき本である。

科学の歴史を、いずれ判ることが判っていった年代譜だけとしたり味気ない。むしろ方法学派の収縮・弛緩説、ガレヌスの体液説、ブラウンの興奮説、その他さまざまの「錯誤」から学び、しかもそこから抜けだしてきた病理思想の曲折を本書から学ぶべき

だらう。

解説や索引にも訳者の熱意が感じられる。

(梶田 昭)

〔西村書店 一九八七年 三三二頁 六、五〇〇円〕

板倉聖宣『模倣の時代』上・下

著者は科学史と科学方法論の研究者である。脚気の歴史について、科学方法論とか認識論に対する誤解がこんなに身近なところで、こんなに長期にわたって害毒を及ぼすことがありうるという事は考えてもみなかったと言っている。

日本の医学は幕末にはオランダ、明治に入ってからドイツ医学と西洋医学のみに追随し、漢方を非科学として退けて来た。ところが脚気に関しては西洋医学には頼みとすべき手がかりがまったくなかったのに対し、漢方では多年この病気を手がけ、原因は白米食にあるとして、小豆粥と麦飯を常食とする事によって治療していた。洋医の多くは脚気を伝染病と考え、便秘、水腫、衝心に対症療法、それと転地しか行なうことができなかった。こうした創造性を欠く模倣主義に加え、青山胤通、石黒忠恵らに代表される頑迷な権威主義が脚気研究の進歩を妨げ、兵士その他多くの患者の生命をこの病気のために失わせるという結果をひき起こすに至った。本書はこれを「模倣の時代」と称して強調する。

脚気の伝染説は、病気の発生状況がマラリア等に似るところか

ら病原をミアスマとする考えが洋医の多くに広まっていた。一八八五年緒方正規は脚気菌を発見したと発表した。これを純粋培養して動物に接種して発病させることに成功したというのであったが、その後の追試では誰もこれを認める者はなく、四年後陸軍軍医有馬太郎はこれを否定する論文を発表した。北里柴三郎も実験の不備を指摘した。

海軍軍医高木兼寛は、脚気の原因は食物にあると判断し、一八八二年十二月から、ニュージーランド、南アメリカを経由して、二七日の長い航海の後日本に帰った艦には三七一人の乗組員中一六〇人が脚気にかかり、二五人が死んだのを、兵食を改善したところ、翌年二月から同じ航路を二八七日かかって帰った航海では、乗組員三三三名のうち脚気患者は一四、死者ゼロであった。兵食の白米をやめてパンあるいは麦飯とし、副食に栄養価あるものを与えたという以外の条件はまったく同じにしてこの成績を得たのである。高木の兵食改善は *Pates* の理論により  $N:C=1:15$  であるべきを、米食は  $1:28\sim30$  であるのでパン、麦飯を用いて成功したのである。高木はこれで問題は解決したとしてその後さらに学問的に追究しようとしなかった。宗田の言うようにここに高木の立場の限界がある。

陸軍では、石黒は環境を清潔にし、過労を防ぐなどする一方、次のように言っている。「脚気を治療するのに多くの人が信仰するのは麦飯説だ。ただし衛生官たる者、国民の常食たる米をやめさせて、もっぱら麦飯を食わせるという命令を発するには確たる学理上の基礎に拠らねばならぬ。ただし場合によっては、陸軍省

令で兵食は米に代ふるに他の雑穀を混用する事を許し、其価の安い雑穀を代用した時に残余金があったら、養価の多い副食物を購求して兵食に供することを許された。このゆえに多くの部隊が麦飯になって脚気は稀に見る病となった。その減少した原因を麦飯家は麦飯の功に帰するが、諸多の事が綜合して病勢が減じたのかその辺明らかでない」と。

石黒らの頑迷にかかわらず陸軍で麦飯を与え、脚気患者は減少したが、麦飯そのものの効果より、白米を麦飯にかえる事によって浮いた食費を副食物に振り替えたため、ビタミン補給がなされたのであろう。

石黒に信任された森林太郎は Voit の理論などを援用して白米の優位を説いた。

こうして日清、日露両戦役を迎え、戦場に輸送されたのは白米であった。当然多くの兵士が脚気のために命を失った。

戦後一九〇八年に、森を長とする臨時脚気調査会が生まれた。

この時すでに一九〇六年 Eijkman のニワトリの白米病と米ぬかの実験があり、日本人にも食料を問題として取り上げる者が次第にあらわれた。脚気伝染説を信奉して調査委員となった都築甚之助は、米ぬかから抽出した有効成分、アンチペリペリンを生産したが、そのため委員をやめさせられた。一九一〇年には鈴木梅太郎がアペリ酸を発表し、のちにオリザニンと名づけた。Funk は一九一二年に『ビタミン欠乏症』一九一四年に『ビタミン』を著わし、脚気など一連の病気がビタミン欠乏によることが明らかになった。その時期になっても、島蘭順次郎は一九一九年内

科学会宿題報告で「動物の白米食によるビタミン欠乏症と脚気とは類似してはいるが同一のものとすることはできない」と言葉

を濁している。

〔仮設社 一九八八年 B六判 上・四四二頁 二、八〇〇円

下・六二〇頁 三、二〇〇円〕

〔安井 広〕

板倉聖宣編『脚気の歴史』—資料・文献年表

ワープロによったとあるが、広汎な資料が集められ、中には長文の解説が付されているものもある。強いて筆者の気がついたものをあげれば、一九六一年四月に雑誌『医学史研究』が発刊されたことが落ちてゐる。その一一号には宗田一「わが国脚気病研究史に関する二、三の考察」が載っている。また「一九六六年五月東京で『保健薬を診断する』集会が開かれる」とあるのに、一九六八年に発行された三一新書の同名の書が見られない。

〔安井 広〕

〔つばさ書房 一九八八年 菊判 一七〇頁 二、〇〇〇円〕

ウィルヒョウ著・川喜田愛郎解説・梶田昭訳

『細胞病理学』

医学史・生物学史の領域での最大級の古典のひとつ、ウィルヒョウの『細胞病理学』の新訳が、朝日出版社の「科学の名著」シリーズの一冊として刊行された。

このシリーズは、全五十巻という企画で昭和五十五年にスタートした。企画内容を見ると、生命科学・医学分野の占める比重が大きいこと、中国・インド・アラビアなど非西欧科学の古典がいくつかり上げられている点に、このシリーズの特色がある。本邦初訳の古典も多い。第Ⅰ期分の十巻と別巻一は、昭和五十五年に刊行されて、日本翻訳家協会の昭和五十六年度日本翻訳出版文化賞を受賞した。だがその後、刊行は中断され、企画の存続が危惧されていたが、七年を経たいま、第Ⅱ期分十巻の刊行が再開され、ウィルヒョウの大著の邦訳をようやく手にすることができたわけである。息の長い出版活動に敬意を払い、今後を期待するものである。

ウィルヒョウの人物像や業績については、ここで多言を要しないであろう。アックークネヒトの著名な評伝を日本語で読むことができるし（館野之男・村上陽一郎他訳『ウィルヒョウの生涯』昭和五十九年、サイエンス社）、川喜田愛郎先生の『近代医学の史的基盤 下』にも、二十数ページにわたってウィルヒョウに関する論述がある。『細胞病理学』の邦訳も、故吉田富三先生によ

るものが昭和三十二年に南山堂から出され、昭和五十四年にはその復刻版も出版されている。ただし吉田先生のこの訳は、原著第四版（一八七二）に基づいているが、初版に比して文章や挿画が追加され、文体も初版の口述体から論述体に改められ、翻訳もそれに従っている。

このたびの「科学の名著」の中の一冊は、原著初版（一八五八）の本邦初訳である。この初版は、周知のように、ウィルヒョウがベルリンの医師を対象として二〇回にわたっておこなった講演内容をそのままにしたものであり、口述体で書かれている。東京女子医大病理学教授、梶田昭先生の翻訳も講演口調でなされており、流麗かつ格調高く、臨場感あふれるものがあって、音読してみたくなるほどである。通常の翻訳以上に御苦労が多かったであろうと推測し、改めて敬意を表する次第である。

本書の巻頭には、「ウィルヒョウと現代生物学・医学」と題する川喜田先生の序文、ならびに梶田先生の「ウィルヒョウと『細胞病理学』」という長文の論説が収められている。とくに後者は、ウィルヒョウのほかの著述からも数多く引用され、また豊富な参考文献を駆使して、ウィルヒョウの人と業績、『細胞病理学』の構造、病理学史におけるその意義を論じておられる。十九世紀医学を理解する上で、必見の論説といえよう。

（梶木田 辰彦）

「科学の名著 第Ⅱ期 第二巻 朝日出版社 東京  
一九八八年 四六判 三七六頁 六、五〇〇円」

## 根岸謙之助『医の民俗』

民俗学者桜井満氏編集責任の『日本の民俗学シリーズ』第七冊目として刊行された本書は、著者のいう「医療民俗学」研究（医療習俗の科学的研究）の「各論」の一部であるという。

著者は「あとがき」で、「民俗学は事実をして語らしめるという方法を尊重するので、理論的考察は総論にゆずり、今回はできるだけ医療習俗の実態をくわしく紹介するという方法をとった」と言っている。

評者が日本医史学会編『図録日本医事文化史料集成』第四卷（三二書房、一九七八）に「民俗医療」を設けたのも、著者が「まえがき」で言及するのと似た発想からでもあるが、図で例示するのは別に、著者が本書を「医療民俗学の各論」の一部とするとき、問題点がなくはない。

本書の構成を略記すれば、次の通りである。

一 薬物による治療（内用・外用・家伝薬）、二 呪術による治療（内・外・歯・皮膚・耳鼻・眼の各科、呪歌）、三 精神病とその治療、四 医療としての年中行事、五 家畜医療。

このうち、三、四は、従来から比較的研究されてきた領域であり、著者もこれらの章では文献を提示しての論及が見られる。これら領域については、他により適当な評者がおられるので、ここではふれないが、一、二について見る限り、例示されている医療民俗が、いつの時代のものなのか、現在もその地域に見られるの

か、さらにその民俗が歴史的にどこまで遡れるのかについてもほとんど述べられていないので、民俗の由来・伝承・定着の状況が理解しにくい。

評者も拙著『健康と病の民俗誌』（健友館、一九八四）でふれたように、古くからの民俗とされるものが意外と新しいものだったり、その発生がたわいもない事だったりするのもあって、真の意味での庶民の生活の智慧や「経験」的医療民俗かどうかの分別が必要である。このため、民俗療法・民俗伝承薬と称されるものの個別的、地域的・歴史的な基礎調査が必要であり、その調査結果の提示と考察が「各論」となるべきだろう。

たとえば、日本古来の薬草、外来の薬草についてみても、それらにまつわる医療民俗は、正規の近代教科書の類では切り捨てられてしまっているもので、それらを文献的に再発掘し、また聞き書で採集するなどの基礎作業が重要課題になる。

こうした上で、各地に見られる類似療法の分布、薬草の効能の差異の分布から、伝承ルートの解明、文化背景の考察に言及するのでなければ、その地域特有の民俗か否かの判断も出てこないのではあるまいか。

このように見ると、せっかく著者自身がフィールドワークで採集された多くの医療民俗事項も、ここでは十分に生かされていないのがおしまれる。

（宗田 一）

〔日本の民俗学シリーズ7 雄山閣 東京 一九八八年〕

B六判 二〇八頁 一、八〇〇円〕

## 石田純郎『江戸のオランダ医』

本書は来日したオランダ医の研究を通じて、日本医学の近代化の歴史を熱心に考察されている石田純郎博士のユニークな労作である。日本の近代化は明治維新にはじまるのではなく、さらに遡って江戸中期以来興隆した蘭学にその起点を求める学者が多い。

大槻玄沢によれば、蘭学とは「阿蘭陀ノ学問ラズルコト」であった。そのため蘭学者たちは熱心にオランダ原書の翻訳につとめ、またあらゆる機会を求めて蘭館医たちに学んだのである。しかし、約一五〇人を数えたという蘭館医たちの実態は、現在もまだほとんど知られていない。

著者は江戸時代から明治初期にかけて日本へ来たオランダ医たちの足跡を追い、その資料を求めて精力的にオランダの現地調査を繰返して、つぎつぎと重要な発見をされている。著者は二十年にもわたって八回もオランダに赴いて原史料を博搜されているだけに、その論説は大変魅力的であり、豊富な写真類が随所に挿入されていて興味津々である。

本書の構成は、まず来日オランダ医の研究を志した動機を語る「わたしの蘭学事始」から筆を起こして、著者独特のオランダ調査方法の種明かしをして読者を魅了したあと、一転して「西洋科学の伝来」、「日本でジェンナーたち」と、わが国の西洋医学発展の歴史を略述して導入部としている。

ついでいよいよ本論に入り、「ファン・デン・ブルックとポンペ」、「オランダ軍医の医学教育」、「ボードイン」、「文明開化のオ

ランダ医」という各章を立てて、来日オランダ医たちの経歴や業績などを、興味ある新事実も混じえながら平易な表現で論述を進めている。

来日オランダ医たちの歴史的背景を探り、その日本医学への影響を考察してきた著者は、彼らの多くが軍医であり、彼らが日本へもたらしたものは軍医学校の医学と治療法であったことを発見し、現在の日本の医科大学はそのカリキュラムも歴史も、幕末のウトレヒト陸軍軍医学校の影響をいまだに受けているのである、と主張して本書を締めくくっている。著者のこの主張はまことに興味深く、また大変魅力的である。とくに著者の「日本の国立の医大には、医学とは何かを知る医学哲学、医学概論、医学史の研究室のないのも、欧米の大学と比較しての極立った特徴であり、「明らかに軍医学校的特徴である」との指摘は傾聴に価するものがあり、医学史研究に新たな一石を投じたものといえよう。

蘭学、とくに蘭方医学として日本に伝えられたものが、本国のオランダではいかなる歴史をもつものであったのか、この興味深い重要な、しかしきわめて困難な研究に対し、本書は貴重な道しるべの一つとなりうるものであろう。

原史料を求めて外国で現地調査を行なうという、これまでわが国の医史学者が望んで果し得なかった大きな夢を着々と実現されておられる著者の、今後の活躍を期待するところ大である。

(津田 進三)

〔三省堂選書 三省堂 一九八八年  
四六判 二四〇頁 一、五〇〇円〕

## 杉田暉道『ブッダの医学』

杉田暉道先生が『ブッダの医学』の本を、平河出版社から出された。杉田先生は、生れながらにして、仏道を身についた学者である。そして仏道から離れて、仏道を誰よりも親しく見ておられる。だからこの本でも、先生は仏教にべったりとしがみついている。身にしみ込まれた仏教をどこかに置き去りにして、ご自分の研究は仏教の信仰を相手にしておられる。

それ故に、述べられる仏教信仰は、庶民たちの生々しい生活の中で、生きたままの姿で紹介されている。それが本文の「わたしの体験したブダガヤ」の項のなかで躍動している（二二―二九頁）。先生は昭和五十三年八月から四カ月現地に滞在して、現在のインドの人々に接しられた。モヘンジョダロでは、素早く「陶製の荷車」(図1)を発見された。四カ月滞在されても、砂ほこの路をおおいに歩かれたのである。

それ故に、先生の仏教は仏道である。その道の始めは、ブッダが弱小国シヤカ族の王子だった頃、つまり、インドが純粹のバラモン社会だった時代、バラモンの輪廻思想からとび抜けて、新しくインドの仏教を生み出された。これは非アーリア人の彼の、異質の宗教の創造であった。それが、滲透していた、バラモンの權威を否定して拡大した。それは当時の新興商工業者に採用され、種族時代のような共和制形体の教団を創った。

だいいち、ブッダの教団は自由平等博愛で、大乘仏教となれ

ば、新しいボサツの方針とまったく同じではないか。これが商工業者から一般庶民のなかに拡大され、富裕や息災への信仰となる。信仰となれば、祈りの結末は神様に委ねられ、すべての現世のことは神と人との中間で浮遊する。それが平安時代の始めにわが国に移されると、多数の宗派信仰に発展し、偶像の礼拝に彩られ、儀礼に飾られる。その中で、僅かばかりの仏教医学が命脈を伸ばすのである。

先生の『ブッダの医学』では、初期仏教から説き起こされ、仏教史の発展に沿って、大乘仏教の興起から古代インドの医療、次いで紀元二世紀の仏教医学が紹介され、四世紀、七世紀の仏教医学が述べられる。紀元二世紀では四分律・僧祇律・十誦律を細かく分析され、黄病の治療に人間の生血を飲む法（仏はこれを禁止する）や、三処毛の剃去の話が面白い。四世紀の医学は、金光明最勝王経を中心とし、呵梨勒が前記にひきつづき薬中の王とされているのが面白い。とくにこの期の胡椒が、尽寿薬に取り入れられ、西欧の胡椒史と噛み合っていることが面白い。ここに、一五葉の薬草を植物学図鑑図で挿入されたこと、きわめて当を得ている。

七世紀の仏教医学では、南海寄帰内法伝が紹介される。その第三巻で義浄は、インドの五明論で、修行僧の必須科目のうち八医の精通を論じ、現代漢方でよく使用される中国特産の人參・茯苓・当歸・遠志等が紹介される。

病因としては、紀元前二世紀のタントラから発する地水火風空の四元素不調論から、紀元四世紀、七世紀の三元素不調論に移



る。これは西欧流の自然科学的論拠ではなく、東洋医学の爛熟・停滞の成果と指摘しておられる。

この本では、全篇にわたり、先生の知見・指摘が多く、鑑<sup>まじ</sup>られる。卓見である。それが患者の治療に結びついて、冷・熱・運動・安静の方向が示される。使用する薬も、インド・中国・日本にわたり、東洋医学をひとたびバラバラにして、章末でそれを再びまとめられる。しかもそれを、二〇〇頁ほどのこの本のなかに器用に収めている。吾々のような素人にもわかるし、多分、専門家にもずしりと参考になると思われる。

装幀もスマートである。裏表の表紙が、章間の区切りとともに、多分、西域の織物の模様を小間切りにして（この出所を、こんど拝見したとき、先生からうかがっておきます）、十分の余裕をもって、難かしい問答にオアシスを与えてくださる。芥川龍之介が生き返ってきて、この本を書いたら、やはりこういう風に装幀させたであらう。

（関根 正雄）

〔平河出版社 B六判 二〇〇頁 二、〇〇〇円〕

### 臨床検査小史編集委員会編『臨床検査小史』

昭和四十七年に『日本衛生検査技師会史』が同会から刊行された。これは技師会の設立から、その後の発達を全国的規模でまとめたもので、内容的にその評価は高い。

一方、臨床検査を専門とする医師らが中心となって組織されている日本臨床病理学会では、昭和六十年学会設立三十周年を記念して、学会史が編纂された。両者は唇齒輔車の関係にあつて、この方面の學術活動と組織づくりの歴史が一層鮮明となった。

筆者は昭和六十三年二月『日本の臨床検査史—その起源と発達』を公刊したが、ほぼ期を一にして日本臨床衛生検査技師会が法人化二十周年記念として『臨床検査小史』を上梓した。拙著と合わせて通覧すれば、現代日本の臨床検査の発達過程が一目瞭然となる。

本書の内容と特徴はつきのごとくである。第一部 臨床検査の沿革（概説）、第二部 臨床検査の推移・江戸期より明治期（笠原、川端）、大正期より昭和二十年（笠原、菅沼、中橋）、昭和二十一年より三十年（小林、笠原）、昭和三十四年以降（青木、稲生、笠原）、第二次世界大戦後の臨床検査の進歩（笠原）、第三部 臨床検査の制度と組織、第四部 臨床検査技師の教育、第五部 臨床検査技術者の組織、年表。

以上は五三九頁の大著で、十名の共同分担執筆による労作である。執筆者は、いずれも戦後の斯界で、永年その業にたずさわつ

てきた歴史的証人である。とくに小林種一は、戦中戦後をこの分野で生き抜いて来たので、史実資料が的確であり、本書はその点からも貴重な史料となろう。

医師自身が行なってきた臨床検査が専門技師らにより実施されている現在、この転換から今日までの推移は決して坦々としたものではなかったし、その間の苦悩がいたるところ滲みでて記述されている。とくに戦後の臨床検査の発達をいかに実地へ向けて導入したか、その点の史料が数多く収載されている。

また、年表（一四〇三～一九八三）が五〇頁にわたり巻末に付されており、この労作はまことに多しななければならない。

同学の一人として、筆者は本書の刊行を心から祝福している。

（寺畑 喜朔）

〔日本臨床衛生検査技師会 丁二〇三 東京都千代田区九段北  
四一―五 市ヶ谷法曹ビル 昭和六十三年三月 B五判〕

五三九頁 一〇、〇〇〇円〕

### 高木春山『本草図説』――(植物)

高木春山の本草図説が、抜粋編集のうえ復刻されることになって、その第一冊「植物」が刊行された。「水産」「動物」へと続くという。江戸時代の美しい名著には、展覧会や図書館でお目にかかることはできるが、その最高峰ともいえるべき春山の図説を座右に置いて随時楽しめるようになるのは、ありがたいことである。

写真と印刷が進歩して植物でも動物でも、美しくてまともりのよい書物に事欠かぬようになってもお、本草学的図譜が登場してくるのは、江戸時代の自然科学的發展への関心の高まりがあるためと思う。

本草学のない手には、下級武士が多かった。戦国の大名はできるだけ多くの戦闘要員を抱えたまま大平の世に入り、武士の大過剰となった。彼等の給与は開幕当時の石高に固定されていたから、向上する生活を維持するためには、役職手当による生活費の補給が必要であった。役職は作られたが、なすべき仕事はなかった。『鸚鵡籠中記』の抄録『元禄御置奉行の日記』によく示されている。江戸時代の武士は怠惰を強制され、時間をもてあましていた。『本草図譜』の著者岩崎灌園は幕臣であり、春山も御家人であったという。尾張本草家中の俊才、大窪昌章も藩士であった。その稿本の書き始めに「大窪昌章弓馬余興」と二行にかいた朱印を捺したものがあつた。あの見事な『本草摺影』の著者にとつても本草学は余興（ひまつぶし）であつた。

本草学の一部を近代自然科学にまで引き上げた飯沼慾斎は民間人であつて、任官していないことが注目される。武士という支配階級に属せず、自分の好む研究に熱中した。彼の植物研究は余興ではなかつた。その心境を述べた文章は見当らないが、『草木図説』に全精神を打こんで、研究それ自体についての深い思索、哲学をもっていたといえよう。これは武士としての責任から解放されていたためではあるまいか。彼はその植物学の知識を生業に応用して『大黃私考』を書き、本草学を近代生薬学に高めていたのであ

る。春山は博物学的に、灌園は薬物学的な範囲において本草を図説した。その図が写実的で美しく、範囲の広いことで、両者共最高峰といえる。しかし、自然科学的な立場からみると、愆齋にはるかに及ばない。

本草学は尾張本草学の末路に見られるように、趣味好事家的行事の中に自然消滅した。これは研究そのものに対する反省、哲学を欠いていたためといえよう。『本草図説』は以上のような、武士の弓馬余興としての文化的生産物の最高峰と言うべきである。今後の調査によっては、同様な業績の、範囲の狭いものの発掘はありうると思われる。

(安江 政一)

〔リプロポート 一九八八年 縦二五cm、横二六cm

一一八頁 三、九〇〇円〕

カルロ・M・チボラ著 日野秀逸訳

『ベストと都市国家—ルネサンスの公衆衛生と医師—』

本書の内容は二部に分かれており、第一部はベスト流行を契機として大きく揺れ動いたイタリア社会と、それに対処する医師たちの活動について、第二部は、ベストが猛威を振ったイタリア・トスカナ地方の医師の動静について記述している。

原著者カルロ・M・チボラは経済史が専門ということであるが、本書第一部では、ベスト流行を都市経済の立場から描写している

点がきわめて印象的である。医史学では、歴史の中から医学にかかわる部分をえぐり出して取り上げる傾向が強いが、本書のように違った立場、異った価値観から医学をみる史観も大切であることを感ずる。とくに衛生、公衆衛生は、別名社会医学とも呼ばれているように、社会全体の動きを無視してはその歴史は成り立たないであろう。

本書第一部では、各都市衛生局からベスト防疫の重責を課せられた医師たちが、当時の医学レベルからみて唯一の有効な流行予防手段であった交通制限を強く主張するのであるが、努力すればする程、都市間の交易を妨害され、多大の経済損失を蒙る商人たち、そしてその結果職を失い、生活が困窮する労働者たちの強い反感を買い、石を投げつけられるなどの迫害を受けた事実が詳しく述べられている。その結果、公衆衛生に従事する一部の医師は社会の経済要求と妥協し、あるいは先見の明を持たぬ大衆の圧迫に屈服してしまうのであるが、しかしそのような都市の多くは、結局はベストの侵入を受けて取り返しのつかない惨状を呈するに至る。

本書は単にルネッサンス期のイタリアの状況を回顧しているだけではなく、現代に於ける生きた歴史書といえることができよう。

公衆衛生、社会医学あるいは予防医学に従事する医師たちが、社会的に何の報いもないばかりか、逆に近視眼的な社会の多数派から圧迫されるといふパターンは、現代に至るまで絶えず繰り返されており、この日本も例外ではない。環境保全、禁煙、禁酒、

性道徳向上などを叫ぶ公衆衛生の人たちは、もはや石や礫を投げつけられることはなくなつたにしても、世間からうとまれ、うるさがれ、果ては白眼視されるのである。

このような社会の現状に対して欲求不満をもつ公衆衛生関係者ならびに公衆衛生活動に関心をもち、陰に陽にそれを援助しておられる臨床医学関係者には、ぜひ読んでもらいたい本である。

(山本 俊一)

[平凡社自然叢書 6

平凡社 一九八八年

B 六判 二、六〇〇円]